

利き手指の可逆性と触見当の育ち

矢野 泉

《La Réversivirité》 between the Dominant Hands/Fingers and the Growth of the Direction on the Sense of Touch.

YANO Izumi

(要旨)

現象学者メルロ=ポンティの Chiasme キアスム概念を発展させると、手袋の表裏の譬えの通り、「わたし(自己)は君(他者)の立場に居あわせる」の謂いを見出せる。Le Chiasme「交叉配列」は「je わたしの必要を差し置いても先に tu 君の必要を満たす」という「je suis á tu」(君に居あわせるわたし)において、「tu 君」という「主」が「je わたし」という「客」の客となり、わたしたちの間に交叉する「隣人性」(Le sens qui je suis á tu)を黙示する。メルロ=ポンティの『知覚の現象学』における「tu 君」の君、未完の遺作・研究ノート『見えるものと見えないもの』における手袋の譬えにみられる「La Réversivirité 可逆性」から手がかりを得て、知覚の「隣人性」を翻案し、利き手の指先の知覚をひっくり返して「利き手ではない指先の知覚」を成長させる動き遊びのパズルを制作した。指先には、知覚の育ち「触見当」(The Direction on The sense of Touch)がある。その育ちは、指先知覚の隠れた「働きのシステム」である。わたしは、可逆的な「働きのシステム」を引き出し、メルロ=ポンティの「臨在」、現象学者マリオンが黙示する「心配する現れ」(居あわせること)に関連させて意味づけた。

1. 問題設定

2014年、脳が疲れていると、右側におかれた瓶を倒す、右側におかれたグラスをつかみそこねる、右側の壁にぶつかるといった現象が頻繁に生じていた。そこでわたしは、右手が利き手指として機能低下しているのであれば、左手を右手に替わる利き手指に育てられないかと問いを立てた。眼科を受診

し、右目視力低下と心因性視野障害注 1)を医師 A から指摘された。眼科学の領域について、わたしは学問的キャリアを持たない。そこで、閃いたのが、Rubin, David の「図と地」Figure and Ground 注 2)と Gestalt Psychology 注 3)からの転換可能性である。利き手指は「地」、利き手を補佐する手指は「図」に捉えられる。脳神経生理学者の第一人者のひとり、久保田競博士(医学)の主著『手と脳』注 4)によれば、手は外部の脳であり、脳神経科学の立場からの利き手に関する研究成果が同著に収められている。「図と地」に関する従来の知見をひっくり返して、「図」と「地」が二つの絵図として同時に見られることを解明できれば、利き手指に可逆性があるといえる。

「図と地」の関係への着目は、現象学者の村上靖彦氏も然りであり、看護現場での出来事の語りをインタビューで聴いている。村上氏によると、看護現場の「行為と背景は図と地の関係になる。これを示すのがしばしば挟まれる挿入なのである。」談話に拡散している「挿入句は<地>を表し、そのうえで、主節が<図>となって描かれる。」(村上,2013:301)雑談を含め色々な語りを聴く中で研究対象となる主題が本筋として現れてくると、わたしは、村上氏のインタビューにおける「図と地」の捉え方が分かる。村上氏は「臨床実践の現象学研究会」を主催していた西村ユミ氏と出会った (Ibid:403)。同研究会における西村氏のコメントの鋭敏さに舌を巻いた村上氏は、西村氏の主著『語りかける身体—看護ケアの現象学』(2001)にも惹かれ、村上氏の師マルク・リシールの身体現象学との近さを感じたと述べている (Ibid)。西村氏は、現在、首都大学東京大学院で教授している。西村氏は、フランス思想研究者の松葉祥一氏との対談(松葉・西村,2010:59-77)において、「看護学の場合、テーマとしては、メルロ=ポンティの身体論が重要であり、引用が多い」という松葉氏の問いかけに対して、「わたしのような看護実践を研究する者はフッサールではなく、ハイデガーやメルロ=ポンティに関心を持つことが多いようだ」と西村氏は応じている。西村氏は、「看護学を大学教育に取り入れ始めたのは米国で、1970年代から現象学的アプローチに関心がもたれた。カナダや英国、北欧でもメルロ=ポンティ現象学を手がかりにした研究がたくさん紹介されている」(Ibid)と述べている。

看護学は専門ではないが、自己自身の世話をし、研究ノートを作成しているわたしにとって、看護学での現象学の普及は、教育学におけるそれと同様関心がある。左右の目の問題を本稿で論ずるには、手の触覚的認知を活用する、回復しない身体認知神経リハビリテーション(河本英夫,2013:174-187)も無視できない。松葉氏と三浦藍氏が監訳した患者の生活世界の現象学的研究があり、訳書のなかで、メルロ=ポンティ『知覚の現象学』(1962=1945)からの引用文が示されている。「身体は、知覚経験のなかに意味を見出そうとするとき、知覚野からの『呼びかけ』に開かれる」(1962:434)。この著作には、ある患者が身体と協力し連携、次第に、彼女の「現状」の身体の可能性に従うようになったという語りが示されている。(松葉・三浦:216)患者の語りを解釈するにあたり、メルロ=ポンティ著作の『知覚の現象学』のほか、『見えるものと見えないもの』も参考文献に挙げられている。(Ibid:228)

先行研究者のひとり、村上氏は、「広い意味では現象学とは、人間の経験とその背景をその運動と生成において捉える学である。インタビューや参与観察のデータに、今まで知らなかった現象を探し出すこと、これが質的研究における現象学の目的となる。大まかには未知の現象の発見、各現象の運動と構造の分析、諸現象間の布置の再構成という三つの段階からなり、これらの段階を行ったり来たりすることになる。現象学において方法とは、探求すべき現象が見えてくる《視点の取り方》と、現象の《見方》である。「ある研究対象に対してどのような方法が適切なのかは、考察を始めてみないことにはわからない。研究対象に即した形でそのつど方法は発見される必要がある。フッサールにとっても、現象学的還元という方法は、事象そのものの要請にとって後《から》生まれたものである。」(村上,2013:342-343.)

ここまで、わたしの問いに関連する先行研究をいくつか取り上げてきた。先行研究はわたしにとって、いわば航行のためのいくつかの参考である。教育学者としてのわたしが、自らの身体を対象にし、勝手気ままなことを書いているわけではないという背景を、読者に伝えるために、取り上げた。

右目が見えないのは、利き手である右手に頼りすぎていて、大脳後頭葉視覚野に血流停滞が生ずるからではないか。右手と左手は分割された別々の部

分である。しかし、同じ身体を共有する全体でもある。手の組み方を観察しよう。右利きの人は、右手の親指が上に、左手の親指を下に組む。かつ、右利きの人の腕組みを観察すると、右腕が左腕の上になる(2019/7/12 記録)。これはいかなるメカニズムであるのか。利き手が右手ならば、利き手を支えるように左腕が下になって組まれる。

左右の指の組み方をよく観察すると(2019/3/24,鉛筆描写及び記録)、利き手の人差し指をそうではない方の手の親指と人差し指が挟みあって守っているように示される。身体の部分にも耐久年数がある。利き手の動きがなにか変だと感じたら、反対側の手を使って、右手がやってきた運動をまねてみるとよい。1年目には幼稚園や小学校低学年でやってみたことを辿りなおす、塗り絵やひらがなの上書きを行う、2年目には箸やはさみを使ってみる、果物の皮をむいてみる、3～4年目には裁縫、ビデオデッキの解体など、徐々に難易度を上げていく。利き手でできたことは大抵反対の手でもできる。かつ、右手でやりづらかったことが左手で円滑にできることがある。たとえば、電球の取り替えは左手の方がやりやすいことがわかった。それから、ドライバーで機械を解体することは、右手で行うとすぐに疲れたが、左手では出来たし、円滑な手の動きに導かれるように解体のアイデアが次々わいてきた。

それでは、利き手指に可逆性はあるのか。この可逆性とは、転換可能性である。ひらたく述べれば、ひっくり返すことである。ひっくり返せるのは、利き手指だけではない。感覚を用いて考え方をひっくり返せる。

2.見ると触れる、知覚の運動～「図と地」の次元転換



[左*強ゲシュタルトの「図と地」vs.中央と右*弱ゲシュタルトの「図と地」]

向かって、左の絵図は、ルビンの「盃と顔」、中央の絵図は、「イーグルマンの顔と花瓶」である。「図と地」は、前景に浮かび上がる盃と、後景に退く顔である。二つを同時に見ることは出来ない注 5)と従来考えられてきた。この考え方を、わたしは「図と地」に関する常識と呼ぶ。しかし、この出来事は二次元の絵図を見るという条件が付けられている。

なぜなら、場所はどこでもよいが、わたしの右手を前景に、左手を後景に実際にかざしてみると、前景である右手と後景である左手を、同時に奥行きとして俯瞰することが出来る。この出来事は、三次元だからこそ成立する。俯瞰するという見え方は、二次元を超越する見え方である。二次元における「図と地」を三次元で知覚するために、わたしは「図と地」のコントラストを接近させるという方法を発見した。黒色に白色が浮き上がって見えるのは、二次元の見え方である。しかし、背景を黒色にできるだけ近い灰色にするならば、黒色同様灰色も、背景として沈みこむ色であるから、二次元の絵図の見え方を、三次元へ転換させやすい。これなら花瓶も横顔も同時に見える。

本稿中央の絵図を自著に採用した、ディヴット・イーグルマンという脳神経科学者は、「図と地」を「花瓶と顔」に見立てた。イーグルマンは、「視覚の能動性」注 6)を根拠に、その絵図、「花瓶」と「横顔」を同時に見ることは出来ないと断じた(イーグルマン,太田訳,2016:54)。イーグルマンが断じた真理は無条件に成り立つのだろうか。確かに、二次元の絵図として捉えるならば、同時に二つの絵を見ることはできない。しかし、はめ込みパズルのような薄い立体であると、物の奥行きを想像して捉えるならば、見つめ合う横顔と花瓶を同時に、繰り返し見ることが出来る(2019/8/30 am.9:00 記録)という仮説を立てて実験した。

わたしの実験により、イーグルマンの知見は、誰でも検証可能な真理ではないと分かった。わたしも、イーグルマンの唱える「視覚の能動性」を活用しつつ、イーグルマンの「花瓶と顔」の「図と地」のすなわち「意識地平の志向性」注 7)を「絵画」から「立体パズル」に変えて、「図と地」に関する

真理を変貌させられた。本稿 1 章左図ルビンの「盃と顔」では、二つ同時に見られない絵図であるのに対し、イーグルマンの「花瓶と顔」では、「地」の背景に、目に見えない「地」を想像して挿入出来る。そうすると、「花瓶」と「顔」が二つ同時に見られるようになる。しかし、問題はあった。というのも、「盃と顔」の「図と地」の場合、「図と地」のコントラストが強すぎて、「強ゲシュタルト」注 8)となり、「盃」と「顔」を二つ同時に見ることが出来なかった。コントラストを弱くして「弱ゲシュタルト」の条件を付加するならば、背景の奥行きにパズルを埋め込む「地」を想像して挿入し、「盃」と「顔」を二つ同時に見ることが出来る。同時に見ることのできない「図と地」は、ゲシュタルト心理学者たちによって取り上げられ、認知心理学のテキスト(岡林春雄,2019)に掲載されるほど通用している。

「図と地」の転換の他の実験例として、出席票の表裏を使うメビウスの輪を制作した。帯状の紙の端をねじってつなげ輪を造る。これがメビウスの輪である。出席票で輪を作れるほどの枚数を用意し、記入欄のある方を表にして、セロテープでつなぐ。そのまま出席票の端と端をつなぐのではなく、つなされた出席票の帯を指で一捻りしてから端と端をつなぐ。表が裏になり、裏が表になる可逆性を示す造形物、それがメビウスの輪である。身長 1 センチのわたしの想像上の分身に、その輪の上を道に見立てて、歩いてもらう。わたしの分身に好奇心があれば、歩く地面の景色が、歩いている途中で変容することに気づくだろう。使う出席票をピンク色にする。わたしの分身もピンク色にする。裏地は全面ピンク色であるから、ピンク色のわたしの分身は保護色に守られた昆虫のように、私の分身の動きはわたしの目にはよく見えない。ところが、突然、科目名や氏名、番号などを記入する複数の枠すなわち出席票の表面にピンク色の分身が歩みを進めると、ジャングルのなかの迷彩服を着用した兵士が突然サハラ砂漠に飛び出したようなものだから、地(票)から図(分身)が立ち現れる。表面を動いている間、分身の働きはよく見える。一方、裏面を動いている間、分身の動きは見えない。しかし、「働きが見えない」ということと「働いていない」ことは同じではない。

3.利き手ではない手指の知覚を育てる

わたしの利き手は右である。したがって、利き手を右手、反対側の手を左手と記す。手の指の人差し指だけを上下に動かしてみる。すると、右手と左手では、動く速度、しなやかさに大きな開きがあることが観察される。左右の握力を測るまでもなく、利き手が左右どちらかは、わたしが発見した指を上下に動かす方法で簡単にわかる。

左手の指で塗り絵を描くことと、右手の指で描くことに、違いがあるだろうか。2017年10月6日、『幼児のおけいこシリーズ はじめてのひらがな対象年齢3歳』（ダイソー出版,2014年）を100円ショップで2冊購入し、1冊を左手、もう1冊を右手の実験に使った。まず、興味深かったのは、わたしが幼児のころ苦手としていた文字「な」や「ぬ」を、左でお手本のなぞり書きをすると、右手同様なかなか書けなかったことである。そこで、関心がひかれたのは、塗り絵の塗り方である。左右比べると、明らかな差がある。左手では、塗り絵の枠を飛び出していたり、筆圧が強すぎたり、塗りむらが目立った。そういえば、幼稚園のころ、右手でも最初はこうだったと想起した。塗り絵の枠をはみだしてはいけないというルールを幼稚園教諭から指示された。これには先見的な意味があって、幼児の指に空間把握能力を持たせることである。小学生で、文章を書くようになれば、文字や数字の大きさを均一にする必要がある。将来、指先で空間を見えない枠で囲い、その囲いのなかに文字や数字をおさめられるようになることが、幼児にとっての塗り絵の学びである。1966年、上野毛幼稚園竹組(年長組)では、何の目的で大きな円の内部を枠からはみださないようにクレヨンや色鉛筆で黄色に塗っていたのか、全く意味がわからなかった。しかし、幼稚園教諭の説明の先見的な意味が洞察できなくても、作業に没頭できることは、幼児の強みである。2017年の実験で右手を使った塗り絵は、塗りむらがなく、筆圧もほどよく柔らかい。わたしの右手の指は左より、色鉛筆の先端の動きを意識して道具遣いができている。主体が鉛筆の先端で、わたしの右指は客体である。左手は色鉛筆先端の動きはお構いなし、色鉛筆を握った指で描こうとするから、筆圧が

強すぎるし、描線にあそびがなく、直線勝負、結果、枠からはみ出す。「頭ではわかっているけど実際にはできない」。これは、よくあることである。ゆっくり時間をおいて練習を重ねると、右手の出来に接近するようになる。しかし、脳の疲労が甚だしい。脳はニューロンと呼ばれる神経細胞の網の集合体である。手指を動かすには、神経細胞間での知覚信号の受け渡しが行われる(久保田:27)。

久保田博士によると、手指の動きは脳がつかさどる。認知症患者や重度のうつ病患者に家事が出来なくなるのは、脳の血流が停滞し、知覚信号の受け渡しができなくなるためである。手指と視野も連動している。そこで、わたしは、このメカニズムの流れをひっくり返してみたら、子供にも成人にも見られる心因性視野狭窄を治せるのではないかと 2014 年に自問した。現在までの実験結果では、左手を利き手のように使える頻度を上げれば、知覚信号の動きが活発になり、視野をある程度拡張させることができた。左手を使えば右の視野が拡張される。「視覚の能動性」が働かない時、視野は狭くなる。神経性の疲労から脳の血流が停滞すると、知覚信号の受け渡しが止まる。(2019/9/7pm.6:15,2019/9/10pm.4:44 記録)。

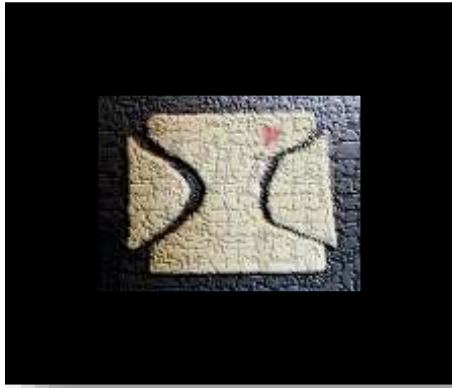
左手指の知覚を育てると、右目の視野が狭くなっている時、右手でつかみそこねて傾いたグラスを、左手がすぐさまおさえて元の状態に戻すようになる。平時の夜にかかってきた電話の子機を右手で操作しながら、左手で箸を使い食事をする事もあった。2019 年初頭、右手の指の使いすぎで、変形関節症を発症した。炎症がひどいとき、左手で家事をする、左手で改札 IC 乗車券「Suica」をタッチするなど、右手を休めることができた。そして、気づいた。社会資本の多くは右利き用に構成されていることを。左利きのひとたちの不便さを。左利き用の箸やはさみが売られているが、学童用である。右利き用の道具を使えるようになるには、道具を入れる角度をひっくり返す。右手なら右から斜め左下に切り込み、左手なら左から斜め右下に切り込む。この左右転換は、頭で意識しすぎるとできないので、指先に備わる脳の知覚分身に動きを委ねる。2017 年秋には、想定より早い時期に、果物の皮を薄く左手指で剥けるようになった。右手指の場合、斜め 45 度の角度で、右から左

へ包丁の刃を入れるのに対して、左手指の場合、同角度で、左から右へ刃を入れる。包丁の刃の向きを逆さまにする。これは、頭脳で想像すると容易だが、実践してみると手ごわい。何度も繰り返し右手指の動きを観察し省察した。すると、人差し指の第一関節の動きが肝腎であることが分かった。同時期、左手指で包丁を研げるようになった。やはり、人差し指の動きに注意を払った。刃を研ぐ、ドライバーを使う、署名をする、こうした動きは、右手指の知覚の経験の逆転させる(2019/6/29 記録)。

4年間の実験のラストは、縫い針を用いた繕い物であった。針の目に糸を通すことは、右手の真似によってすぐにできた。しかし、糸を通した針を布地の表に指し、布をくぐらせて出したいポイントに、針の先端を出せなかった。見当違いの遠い場所に針さきを何度も出しては抜いた。脳は疲れるし、やりそこなってしまうと布地が傷むので、右手でやってしまう。布地と左手の親指と人差し指で細くて硬い針を指先の知覚分身が「図と地」の関係になるには、色鉛筆の先端さながら糸付き針先端を意識できる感覚が必要となる。実際に、実験を重ねることで、針をくぐらせて出したいポイントに近い箇所針の先端を出せるようになってきている。触って判断する経験を積み、指先の知覚分身の動きがより円滑になる。わたしは、教育された指先の感覚を「触見当」とし研究ノートに記(2019/21/am.10:10,2019/7/11,2019/9/1 記録)した。

4. 「図と地」のパズルを用いる知覚の動き遊び

※以下「パズル赤黒△印」は 2019/9/1 筆者制作撮影。三角赤印ひとつの面が表、三角黒印ひとつの面が裏面の立体。廃材段ボールから工作用ハサミで制作した。数字や柄は原材料に刻まれていたもの。黒色床面に壺型立体 1 ピースと左右山型立体 2 ピースを置いて、向かって左から表面→裏面の順で撮影。



日常における身近な材料から現象学的な教材を造ることは、仮に現象学の始祖エドムント・フッサール注9)から離れ、独自の身体現象学を構築したメルロ=ポンティが生きていて、わたしと談論するなら、彼の関心を得られるだろうか。

ハサミで立法体を切り取り、下図の線を引かずに、顔の鼻や唇を捨象した山っぽい立体と、和菓子のような丸みを帯びた立体を切り取った。そうすると、まん中に、壺型立体が残る。赤△印ひとつパズルの盃方パズル右上に、わたしは、赤ペンで三角形ひとつを書きこんだ。ひっくり返した右のパズルの盃型パズル左下に黒筆ペンで三角形ひとつを記した。黒△印ひとつパズルの他の模様、たとえば数字のゼロや9、赤い矢印は、届けられた段ボールの模様である。

前掲パズルは、小学校六年生の算数で学習する線対称を示している。上下にパズルをひっくり返したら、黒△印のあるパズル左下の黒△印が盃の右上に見える。これが縦軸の線対称である。パズル左右をひっくり返したのであったら、赤△印ひとつがあるパズル左上に見える。これは横軸の線対称である。このパズルを造ったのは、わたしの利き手右手指とはさみだが、パズルを教材として使うのは、左手指である。これは一体、何の教材なのかと訊きたいだろう。これは、左手指の「触見当」を育てる教材である。このパズルで、わたしは動き遊びを楽しむうち、点対象にもできることに気づいた。点対象にひっくり返せば、赤と黒の三角印がどの位置に転換されるか分かるだろう。点対象に立体をぐるりとひっくり返す動き遊びは、裁縫の時、スカー

トヤズボン腹回りを留める二穴金属ホックや、シャツやブラウスを留める、穴あき金属ボタンの薄い円柱 360 度東西南北等方位 8 個の穴に針を通して、繰り返し針先の角度を転換して縫う、練習用教材に適している。布を使わないので、布を傷めることもない。右手指でパズルを動かすと素早い、左手指で動かすと鈍い。

わたしがパズルのようなものをひっくり返して遊べるようになったのは、幼稚園の年長組あたりである。年長の幼稚園児であれば、粘土でものを造る遊びや、パズルのはめ込みが出来るようになる。点对称のパズルの動き遊びが、幼稚園児に出来るかどうか、現役幼稚園教諭Qさんにおよそ 40 分間電話インフォーマル・インタビューを行ったところ(2019/9/8:pm.4:00-4:40 記録)、就学前段階に当たる年長さん幼児の数人ならば、本稿でいうパズルの動き遊びができると教示された。遊べる幼児は手指の器用な幼児に限られるという。むろん、その器用さは、道具や動きによって異なるだろう。パズルや粘土遊びが得意であったわたしは、道具や動きによっては不器用で年長組およそ 20 名の中、就学直前、靴紐蝶結びが出来た最後の 1 人だった。線対象の動きは、たとえば家事の中に潜んでいる。雑巾の絞り方をご存じだろうか。わたしは、正しい絞り方を大人から昭和の時代に習った。ロールケーキや巻きずしのように雑巾を丸める。右手指と左手指の親指を隣り合わせで布中央において、人差し指を意識して、握る。右手を順手(じゅんて。手の甲が上)、左手を逆手(さかて。手のひらが上)にして、力を込めて逆方向にねじり、雑巾の水をバケツの中に放出する。雑巾の真ん中の点を中心に、右手は上から下へ、左手は下から上に手指を回転させる。その運動を俯瞰(鳥の目で上空から見る)すると、見事に、線対象になっている。左右の感覚は別々であり、交感しあうシステムがわたしの身体のなかにある。

2019 年 1 月正月休みに、飼い猫の布製おもちゃに穴が開いたので、左手指で繕おうとしたら、「触見当」が左手指に育っていなかったため、左指先が志向する場所とはかけ離れた場所にしか針先を出せなかった。脳も疲れてきて、右手指で要領よく縫い閉じた。裁縫の時、じつは、右手指を使いたくない。なぜなら、布地の厚みや繊維の質の絡み合いにより、裁縫は指の関節に

かかる負担が大きいためである。2018年の年末に繕い物を何枚も何カ所もこなしたら、右手指の関節に激痛が走った。生涯右手指ばかり使うから、ついに、指の関節が変形するヘバーデン結節を罹患し、親指の第一関節と第二関節が変形し軟骨もすり減った。右手指をしばらく休めると、激痛がとれ、使えるようになった。しかし、いったん関節の変形が始まれば、変形のを遅くすることは出来ても、阻むことは出来ない。

むろん、変形した関節が元通りになるわけでもない。そういう訳で、左手指で裁縫が出来ないと、今後の生活に支障が出るのである。二ヶ月前に、布あまりきれを縫い合わせ、布製ベルトを造ることになった(2019/7/11 記録)。わたしは、この位なら、左手指にやらせてもよいだろうと、左手指で縫った。縫い方は右手に比べると粗いが、布製ベルトは出来た。

利き手指の可逆性はあるのかという問いに戻ろう。乳幼児からの癖で、右手の親指を唇に触れて不安を和らげるという、無意識の習慣がわたしにはあった。2018年のある日、習慣通り、親指がわたしの唇に触れた。しかし、驚いたことに、触れた指は、人生で初めて左手の親指であった。この時の出来事は、残念ながら研究ノートに詳しい日付を記していない。あの時はあまりにも疲れていた。この時点まで、わたしは利き手指の可逆性はある、という結論に達していた。

ところが、2018年10月3日 am.8:40、左手で水の入ったグラスを持ち唇に付けるや否や、右手が不随意に左手の親指付け根を叩いた。その為、グラスから水がこぼれて、衣服と床を濡らせた。初めて無意識に右手指が左手指を攻撃した瞬間だった。二回目の攻撃は同年10月16日 pm.6:30にあった。右手指が、無意識に、左手薬指の爪をむしった時、皮膚がはがれて出血し、手のひらに血が飛び散った。三回目は、2019年5月27日 am8:30、朝刊を読んでいた時、突然、右手の人差し指が左目を突きさした出来事である。瞼をあわてて閉じたが、まさかこのような出来事があるとは意識しなかったの、完全には防げなかった。左瞼の中に右手指の先端が入ったのである。痛みが現れたため、同日 am.9:00 過ぎ眼科を受診した。攻撃の主体は、いずれも右手の人差し指であった。これらは、利き手指の序列逆転を阻止するとい

う目的からの行動であったと省察できる。左記を理由に、「可逆性」は右手を優先して使うという条件付きで「ある」と考えた。しかし、この考えは後述する出来事を理由として反転する。出来事の根本的な本質を見極めようとした哲学者はフッサールである。フランス人モーリス・メルロ＝ポンティは、フッサールのドイツ語の現象学に関する著作はじめてフランス語に翻訳し、哲学博士の学位を取った。メルロ＝ポンティ未完の遺稿、研究ノート(Le visible at L'invisible:311-312)に、「交叉配列」(Le Chiasme=ポンティの造語で絡み合い(L'Entrelacs)の優先順位)わたしの日本語訳 2019/9/10 am.10:25)と「可逆性」(ひっくり返せること LaRéversivirité)について記録されている。この「交叉配列」は、わたしが観察した左右の手指の組み方をはじめ、4年にわたるわたしの研究記録に照応している。手指の組み方の優先順位や利き手指の可逆性の問いの生成は、メルロ＝ポンティの「交叉配列」(「絡み合いの優先順位」わたしの翻訳)と「可逆性」の発見注 10)に触発されていることを、明らかにしておく。

わたしはメルロ＝ポンティの遺作となった書きかけの「研究ノート」『見えるものと見えないもの』に、メルロ＝ポンティの主な大著『知覚の現象学』における「両義性」を超える、日常世界のリアリティを帯びた、「可逆性」(わたしの立場を留保して<「還元して」:現象学用語>あなたの立場がわかるという隣人性)を示された。わたしは隣人性について問う。隣人性に関しては、聖書学の荒井献氏が著作(荒井,2005)で論じているとおり、「わたしはあなたの隣人となることができる」という角度に立脚する。すなわち、「あなたの隣人 t u の位置に居る」のである。交叉配列の訳語に関していうと、原書のフランス語 chiasme の発音は「キアスム」である。交差配列は「内と外が互いに密着している」事態である。この、(メルロ＝ポンティ=滝浦・木田, 1994=1964:389)というメルロ＝ポンティの chiasme 概念を発展させると、手袋の譬えの通り、表裏は密着して、「わたし(自己)は十分にあなた(他者)の立場に居る」の謂いを見出せる。「交叉配列」は「わたしの必要を差し置いても先にあなたの必要を満たす」という「あなたとわたし」において、あなたという客がわたしの主となる「隣人性」を黙示する。メルロ＝ポンティの手

袋の譬えから手がかりを得て、わたしは、メルロ=ポンティの「可逆性」から、誰かに求められる隣人として居あわせる「隣人性」「心配する現れ」を翻案する。

5.結論～利き手指知覚の可逆性(La Rēversiviritē)と「隣人性」(Le sens qui je suis á tu)「心配する現れ」(La Présence de Sorge)

ある日、無意識にわたしの左手指がわたしの唇に触れた時、「意識の地平」の変容が起きた。しかし、「変容」は解除され元の状態に戻った注 11)。その後三度にわたり、右手から左手ないし左半身に対する不随意の攻撃があった。したがって、利き手指の序列に、ある程度の可逆性はあるが、完全な可逆性はないと結論しようとした。脳神経科学者久保田博士が論じた、利き手は生まれつき決まっている注 12)という学説に、わたしは十分な根拠なく逆らうわけにはいかなかったからだ。利き手の右手指でなければ出来ないこと、左手指でなければ出来ないことは、それぞれある。先述した利き手による不随意の攻撃という出来事が、わたしの結論を揺さぶった注 13)。

まさにその時、久保田説を覆す根拠が取得された。わたしの左親指先は、わたしの唇に吸い込まれ、右指先も穏やかにつづき、入れ替わりにまた左の親指先がわたしの唇に吸い込まれた。これはごく自然な出来事として観察された(2019/9/18,pm.2:16)。手指の組み方や利き手指の可逆性の問いの生成は、メルロ=ポンティの「交叉配列」の思弁と、イーグルマンによる「視覚の運動性」をひっくり返した、わたしの発見による視覚運動の「可逆性」に根拠づけられていることを先に明らかにした。メルロ=ポンティは、『知覚の現象学』「序文」において、「現象学は、『厳密学』たろうとする哲学の野心であるが、またそれと同時に『生きられた』空間、時間、世界についての報告でもある」(Ibid)と宣言した。フッサールの現象学では、「学問が生に対する意義を喪失」(フッサール:19)していることが生きた学問の根本的な問題と布置し、学問の根本をなす学問を問い返さないことが学問の「危機」であると捉えているのに対して、メルロ=ポンティは現象学の知見を応用して、「学問」とい

うより「日常」の生に役立てようとしたと洞察される。現象学を応用して何か具体的な出来事に活かすのならば、形而上学としての哲学の根本を問い直す狭隘な「厳密さ」を失う。(マリオン,1994=1984.)フッサールは、先述したように、哲学の厳密な学として、形相の根本的な本質を探究した。しかし、メルロ=ポンティはフッサールの端緒から発生して日常に密着する科学を発展させたといえるのではないか。(メルロ=ポンティ：170-175)メルロ=ポンティの発展の起爆剤には、フッサールの「生活世界の存在論」(フッサール,1962=1945:316-325.)が黙示される。

形而上学における根本的本質を追及すればするほど、フッサールが危機であると示した日常と学問との接続性を見失うことになると、メルロ=ポンティは心配(=sorge,「ゾルグ」マリオン&ボンジュール,：152)したのではないかと問えないだろうか。マリオンは、ヒトが存在することの不可能性を指摘し、「存在の贈与」を明示する一方、「心配する現れ」(同注 10)を黙示する(マリオン&ボンジュール)。マリオンの「心配する現れ」とメルロ=ポンティの《臨在(LaPrésence)》は通暁している。「臨在」《(LaPrésence,Ibid:752-753)》は、『仏和大辞典』によると、「居あわせること」である。他の日本語訳として、「現存」が大辞典で示される。メルロ=ポンティは、ヒトは世界の主として存在するのではなく、隣人として「世界に居る」(メルロ=ポンティ：761)と思弁した。つまり、「求められる隣人 tuとして「世界に居あわせる」(同注 10)のである。他方、存在は求め制約を受けない永続的かつ超越的なものである。わたしたちはいかなる努力をもってしても、必ずしも思い通りに生きられない。しかも、存在とは異なり、いつも死に臨んでいる「居る」である。「居る」はつかのま贈与されていて、いつしか贈り主である「存在」に「居る」の贈与は還される。この「居る」臨在は、死滅しない「存在」Dieu から区別される実存ではないか。フランス語「(La Présence)」(Ibid:752-753)は、英語では presence、意味は共通している。ヒトはメルロ=ポンティの「臨在」という意味での存在をなしうるものであり、あくまでも創造された可塑性にすぎない。この可塑性のもろさといえは「土の器」にたとえてよいほどである。「à Dieu(アデュー)」(Le Sien, Le visible et L'invisible:37)ヒトは「存在」

という不久の宛先へ行く。フランス語の前置詞「à」は、場所を意味する。Dieu「存在」は、本稿で論じた「意識の地平のメタ次元」である。ヒトの触覚信号の働き、たとえば、左右の手指のパズルの動きを、わたしが選ぶのではなく、わたしを動かすメタ次元が、わたしに動きを選ばせるのである。メルロ=ポンティはこうも記している。「たえず自己自身を選んでいるなどと、偽ることはできない。」(Ibid:753)。

利き手指には、「触見当」の可逆性があると、わたしは結論する。利き手指は生まれつき決められているという久保田博士の知見に敬意を払いつつ、利き手指には可逆性があるという新たな知見を示す。繰り返す。2019/9/19、午後 2:16 身も心も疲れ切った状態でふと唇に入れたのは、利き手である右ではなく左の親指だった。「sorge(心配)」もなく、安堵できる指先の皮膚と唇粘膜との「触見当」の交叉が確認された。

自己内他者、身体は多数の知覚の部分が交信しあって生命を保護している。他者に関する関心や無関心が生まれるのは、そもそも自己のなかに多数の他者がいるからである。自己内他者は、メルロ=ポンティの大著『知覚の現象学』における結びの記述において示される。「君は君の行為そのものに宿っている。君の行為こそ君である…。君の代わりに君自身を差し出す…。君の意義が眩いばかりに現れ出る。それは君の義務だ。それは君の憎しみだ。それは君の愛だ、それは君の誠実だ、それは君の工夫だ…。人間とは諸関係の結び目にすぎない。」(メルロ=ポンティ,1962=1945:762)「君」の「君」は身体における知覚信号のネットワーク動態か。君はよそよそしい vous「あなた」ではない、動態として隣に居合わせる tu「君」である。ある時の「君」は、左手から見れば右の指先、右手から見れば左の指先である。「君」は可逆的な協力者であって敵対者ではない。「君」は自己内他者である。無数の他者がいて、未だ交信していない他者も大勢いる。メルロ=ポンティの現象学には「他者」がないという研究者たちもいるとの暗示もある(西村・松葉/対談,2010)。そのようなことはない。「君」が「君」の他者である。

「他者の経験を分かる」(Ibid.)ところまで「触見当」が育てば、左右は互いを尊重でき共に生かしあう(living together=共生)。序列の優先をめぐる「交

又配列」Le Chiasme は起動しない。左右どちらが先でも後でも良いという次元に、ヒトは育つことが出来る。指先には、埋め込まれた知覚の育ち「触見当」がある。その育ちは、指先の隠れた知覚信号の「働きのシステム」である。わたしは、感覚的に指先の隠れた「働きのシステム」を引きだし、見出される意味を解釈することが出来る。わたしが発見した利き手指の可逆性は、指先に育つ「触見当」(The Direction on The sense of Touch)である。

付記 1<記録>について。後述の注釈 13 でも述べるが、矢野泉が制作した研究ノートがオリジナルの記録である。

付記 2<記号>について。本稿 1 章、村上靖彦氏著作からの引用文における二重山括弧《 》は、Merleau-Ponty, Maurice のフランス語原書において使用されている記号をそのまま用いた。その記号は、原典である邦訳書では、傍点に変換されている。仏文は横書きのうえ、発音記号アクサンテギュ等が付されるので、傍点による強調の記号は使用されないが、日本語書籍は、発音記号もなく縦書きであり、傍点記号に換えられることがある。本稿では、傍点記号を原書の二重山括弧《 》に戻して表記する。本稿が Merleau-Ponty の遺作に触発され、独自の経験を基底にしていることから、題目の可逆性を仏語とした。英文原書を丸括弧に、仏文原書を一重山括弧<>に入れた。小出氏の論文の英文題目に、二重上カンマを付した。※は、短い注釈をしたときの記号として用いた。壺重下線は本稿でとくに強調したい記述に付した。仏文は『小学館ロベール仏和大辞典初版』、独文は『アクセス独和辞典第 3 版』に依った。

<注釈一覧>

注 1) 右目に関して、「心因性視野障害/らせん状視野狭窄」と眼科担当医 A に診断されたのは、2014 年 12 月 16 日である。その時には、目の痛みにより、眼科を受診した。右目裸眼視力は 0.2 である。眼底検査など右視野障害以外に異状は認められなかった。視野検査の名称は、ゴールドマン視野検査、担当医 A に認められた所見は、心因性らせん状視野狭窄である。セカンドオピニオンを求めて、紹介状を眼科医 A にご作成頂き、大学病院附属医療センタ

一の予約を取って、眼科担当医Bによる同種の検査を、2015年3月6日に受けた。結果は、眼科医Aの検査結果では、右眼視野横軸最大180ポイントの内40ポイント、縦軸最大140ポイントの内40であったが、担当医Bの結果は、180ポイントの内横軸150ポイント縦軸140ポイントの内105ポイントであった。注目すべきは日付である。12月16日は繁忙期で、脳疲労が大きかったのに対し、3月6日は、前者に比べれば、閑暇期で、目の痛みはなく、脳疲労は小さかった。担当医Aが所属していた眼科の担当医が医師Cに変わった2019年5月に、同じく目の痛みにより、眼科を受診し、右目視覚の動きが不活発と目視されたため、同年9月6日視野検査の予約となった。予約同日実施。検査の時期は二回目同様、閑暇期で、目の痛みはなく、脳疲労は小さかった。右眼視野横軸最大180ポイントの内150ポイント、縦軸最大140ポイントの内115ポイントを超えた。医師Cの説明によると、「一回目の検査では、右目視野の結果が低くて失明の可能性があったが、今回の結果は、視野検査結果として、これ以上ないほど良かった」(2019年午後零時)であった。因みに、眼科医Aは失明について触れなかった。繁忙期と閑暇期の検査結果を比較すると、横軸視野90ポイント拡張、縦軸視野75ポイント拡張した。「今回の結果は、視野検査結果として、これ以上ないほど良かった」という説明から、横縦軸視野の差に有意を見出した。しかしながら、わたしは、眼科学が専門ではないため、利き手指の交換実験結果と眼科検査結果との、医科学的厳密な因果関係の存否に関する判断を留保する。眼科検査の結果を、本論文に使用する説明を医師Cに行い、承諾を得た。

注2) Rubin J, D. の「図と地」について、鯨岡峻氏が、「図と地」木田・野毛・村田・鷺田編集『現象学事典』(2014:255)において、解説した。視覚野において、何ものかを何ものかとして捉えるきに、その中心に位置しているのが「図」であり、その図の周囲にあつて、背景に退くものが「地」である。

注3) Rubin, D の「図と地」の研究に影響された **Gestalt Psychologist** は行動主義を批判し、「人間の精神現象を生き生きとした姿のままに」(現象学事典, Ibid:6)内観や洞察を方法として捉えている。東山篤規氏と岩切絹代氏は1925年ドイツ、ライプチヒの医学書専門出版社から定期的に刊行されてい

た『心理学雑誌』の 11 部から成る別巻『心理学と感覚器官の生理学』第 1 部に Katz, D が書いた巻頭論文<Der Aufbau der Tastwelt>(「感覚器官の構造」)が、1989 年に英訳された出版物の原典であることを発見した。ドイツ語原典も参考に 1989 年の英語版を日本語に訳し、1925 年のドイツ語原版にはなかった「実験現象学の地平」を副題として日本語訳書に加えた。並びに両氏は、訳書『触覚の世界—実験現象学の地平』において Rubin 以降の Gestalt Psychologist の功績に触れた。ドイツ語原典の雑誌名はじめドイツ語書誌事項の日本語訳は矢野泉が行った。

注 4)久保田博士によると、わたしたちが、手を自由に操れるのは、神経が手と脳の仲だちをしていて、脳が外部環境情報をうけいれ、指令を出して筋肉を収縮させるからである。手をうまく使えるのは、脳をうまく使えるからで、脳にはそのための構造がある。(久保田:10-11 参照)利き手について、赤ちゃんの運動を注意深く見ると、生後第 1 週ですでに反射機能に左右差がある。赤ちゃんの唇の端に手をふれると、赤ちゃんはふれられた側に首を向けるが、右にふれたときのほうが反応しやすい。視覚反応にも左右差があり、右視野に玩具をおいているときの方が長時間見ている傾向がある。左右の運動機能分化は、生まれた時に芽生えがすでにある。(Ibid:194-195 参照)

注 5)Eagleman, D. は「図と地」を視野の闘争(visual competition)と考えた。図は浮立ち、地は背景に退く。

注 6)彼のいう「視覚の能動性」は、フッサールら現象学者がかねてより論じていた知覚の運動における「志向性」と同一といえる。

注 7) これは、フッサールの現象学における基本的な概念のひとつである。ある対象に関する主観的な経験を貯蔵する大脳知覚野である。すなわち、対象についての「意味」を生成する超越論的現象野であり、対象が脳内に現れるようになるための意識のメタ次元である。

注 8) 「強ゲシュタルト」は、触発の刺激しあう明白な「形態」Gestalt (:23) である。他方、図と地の境界が曖昧であるような、見えにくい穏やかな刺激をする触発の「形態」は、弱ゲシュタルトに分類される。目に見えない運動は、メタ次元の運動である。弱ゲシュタルトはメタ次元に布置される。

Köhler, W. (1887-1967) ケーラーら、ゲシュタルト知覚心理学者の考え方は、「観察できない心理学的出来事を理解するため、洞察 (insight) を研究」関心に据え、「観察できる細かな要素を研究することだけでは、問題解決を理解」 (:16) できないとする。「図地反転」などの現象に「強ゲシュタルト」は、触発の刺激しあう明白な「形態」Gestalt (:23) である。(Le visible at L'invisible: 255-256) Rubin の「図と地」 (=figure-ground) は「Gestalt」に共通する。Wertheimer, Max (ヴェルトハイマー, M:1959) の視知覚の研究から導かれた「Law of Prägnanz」プレグナンツ (=Prägnance, Ibid:256-257) の法則を根拠に、「図と地」「像と背景」の見え方における同法則は、最新 (2019 年) の知覚・認知心理学のテキストに取り上げられている。少なくとも 2 つの部分に分かれて認められる知覚の様式で、「空(地)を飛ぶ鳥(図)では、図が簡潔(プレグナンツ)にきわだち、地はあまり意識されない」(岡林春雄『最新知覚・認知心理学：その現在と将来展望』2019年:23, 注7参照)。

注 9) Edmund Husserl (エドムンド・フッサール) は、ユダヤ系ドイツ人で、数学と心理学を研究し、現象学を生んだ。心理学的現象学、社会学的現象学、教育現象学、臨床現象学など、多分野に応用されている。フッサールは、ドイツのフライブルク大学等の教授であったが、晩年はナチスにより、あらゆる学術活動を禁じられた。デカルト哲学の心身二元論、その起源ともいえるヨーロッパのスコラ哲学における形而上学を批判、主観/客観という立場を問い返した。神という概念に頼らず、形相の根本的本質を解き明かそうと試みた。

注 10) 「転換可能性—裏返しになった手袋の指—ひとりの目撃者が《表裏一体のがわ》にまわって見る必要はない。私が一方のがわで手袋の裏が表に密着しているのを見るだけで、私が《一方を通して》他方に触れるだけで十分である(中略)、交叉配列とは、この転換可能性のことなのである。」(メルロ=ポンティ=滝浦・木田, 1994=1964:388) 「私—他者、他者—私の振替えがおこなわれる線があり、境界面があるのである。」(Ibid:389) 「与えられたただ一つの軸、一手袋の先は無である。—しかし、それは人が裏返すことのできる無であり、そのときそのひとがそこに《もろもろの物》を見ることになる

無なのである。」(Ibid:389)第一に、三回使われている「無」について明確にする。本論で論じたように、「図と地」における見えるものは、「メタ次元」を想像して挿入すれば、イーグルマンが不可能だと断じた出来事を可能にできる。見えないものを見るようにするための「メタ次元」は、「そこに見えない何かがある」という関心」が起動しなければ、現れない知覚の原野である。これは、メルロ=ポンティが「研究ノート」において、「無」であると論じた虚空といえる。虚空は、加工されていない三次元の空間である。第二に、わたしが引いた下線部「裏が表」に注目して頂きたい。メルロ=ポンティは「裏」と「表」を区別している。したがって、転換可能性は「可逆性」であって両義性ではない。メルロ=ポンティが「可逆性」(=立場を転換できること)の意味を説明するために手袋の譬え話をするのは、手袋の表裏の見た目と手触りは異なるからである。つまり、お互いの価値観を変えずに、わたしはあなたの立場に居ることは可能であるし、あなたがわたしの立場に居ることも可能である、という謂いである。メルロ=ポンティが示す、人間行動の精神性、つまり、わたしはあなたの、あなたはわたしの価値観に居あわせるという意味である。メルロ=ポンティの遺作となった書きかけの「研究ノート」『見えるものと見えないもの』から、メルロ=ポンティの主な大著『知覚の現象学』における「両義性」を超える、日常世界のリアリティを帯びた「可逆性」(わたしの立場を留保して<=「還元して」:現象学用語>あなたの立場に居るという隣人性)が黙示される。メルロ=ポンティの最期の研究ノートに関して言及したマリオン、ジャン=リュックは、ギイ、プランティ=ボンジュールとの共編著『現象学と形而上学』1994:152)において、メルロ=ポンティ現象学は、マリオンにとっては「形而上学」からの跳躍を黙示したと考量できる。マリオンが考える人間行動の精神性は、「心配する」(sorge:Ibid,ゾルゲ*マリオンのようにフランス語読みすると「ゾルゲ」)現れ(Ibid:151)である。「心配する現れ」であるがゆえに人間性と精神障害との関連性が指摘できる。わたしは、他のいかなる動物と比べても生きることを、より心配する(杞憂する)というシステムの中で動かされる不安定な本質が人間に付与されていると考える。マリオンらが論じたように、ヒトは『「ある」(動詞 sein「ある」)が贈与されてい

る Es gift Sein.」にすぎない(1994:151「=Es gift Sein.」)。わたしは本文でも述べたが、メルロ=ポンティの『知覚の現象学』「序文」(Ibid:1)において、「現象学は、『厳密学』たろうとする哲学の野心であるが、またそれと同時に『生きられた』空間、時間、世界についての報告でもある」(Ibid)と訴える。

注 11)意識のメタ次元に布置する「意識の地平」The perspective は、一時的に変容しても、利き手指が右手指である限り、元の状態に戻ろうとする。その理由は、生来その人が有する、個性的な生命活動の根本的メカニズムを保護する務めが、人体に備えられている為である。生命活動の根本的メカニズムは易々と変容しない。この仕組みは、左利きを右利きに「矯正する」ことは出来ても、左利きが生来の本質を維持する仕組みに通底する。利き手指を尊重して他の手指の「触見当」を育てることは、「矯正」と異なる。

注 12)久保田医学博士は、主著において、利き手は生まれつき決まっていると結論している。新生児に右から、左から、おもちゃを見せる。右に関心を示した新生児の手指を右利き、左に関心を示した新生児の手指を左利きとする実験を行った。わたしは、主として右左のどちらの親指を新生児や乳幼児が吸うのかを、もしくは、左右の人差し指の運動速度を見比べて、利き手指左右の判断基準にしている。

注 13)わたしは、研究論文のデータ及び授業教材の基となる研究ノートを、2011/8/18 木曜から、現象学的心理学者鯨岡峻博士の著書を参照して作成している。たとえば、鯨岡峻.2012年.『エピソード記述を読む』東京大学出版会。現象学的心理学の方法は、わたし自身と身近な他者をフィールドとした観察記録法に適している。観察記録法の手ほどきは箕浦康子博士から受けた。

<参考文献一覧>

荒井献(2005年)『「強さ」の時代に抗して』岩波書店。※荒井氏は、大学紛争の時代に廃止された青山学院大学神学部の教授であった。その後、東京大学大学院宗教学研究室(新約聖書学)教授として赴任、退職し東京大学名誉教授。
東山篤規・岩切絹代訳(2003年)『触覚の世界—実験現象学の地平』新曜社。
フッサール,E.(細谷恒夫・木田元訳)1974年『ヨーロッパ諸学の危機と超越

論的現象学』中央文庫 1190,中央公論新社.

イーグルマン,D(大田直子訳)2016年,『あなたの知らない脳—意識は傍観者である』早川書房.Eagleman,D.(2011)<The Secret Lives of the Brain,The Wyle Agency.UK.>

木田元・野毛啓一・村田純一・鷺田清一編集,(2014年)『現象学事典』弘文堂.
鯨岡峻「図と地」(Figure and Ground)Rubin,Edgar John(1886-1951)『現象学事典』:255.

河本英夫「障害の傍らを通り過ぎる」174-187,(2010年)vol.38-12.『現代思想-特集*臨床現象学—精神医学・リハビリテーション・看護ケア』青土社.
国松孝二編集代表,(2011年)『独和大辞典第2版』小学館.

久保田競(2010年)『手と脳』紀伊国屋書店.

小出良幸(2000年)「認知心理学の博物館活動への応用を目指して—自然史教育心理学への序章—」“Aim to Cognition Psychology Applied to Activity—Introduction to Educational Psychology of National History—”<The Bulletin of Kanagawa Prefect Museum.(Natural Science).no.29:1-31,Mar.>総説,『神奈川県立生命の星・地球博物館紀要』第29号.

西村ユミ・松葉祥一「看護における『現象学的研究』の模索」59-77,(2010年)vol.38-12.『現代思想-特集*臨床現象学—精神医学・リハビリテーション・看護ケア』青土社.

西村ユミ(2001年)『語りかける身体—看護ケアの現象学』)ゆるみ出版.

村上靖彦(2013年)『摘便とお花見—看護の語りの現象学』医学書院.

マリオン, ジャ=リュック & プランティ=ボンジュール,G.『現象学と形而上学』三上真司/重永哲也/檜垣立哉訳(1994年)叢書・ユニベルシタス 433,法政大学出版局.< Marion,J.-L., & Planty=Bonjour,G.,Dieu sans L'être.(1984)Librairie ArtêmeFayard,Press Universitaires de France.>

Merleau-Ponty,Maurice. 『知覚の現象学』,中島盛夫訳(1982年)叢書・ユニベルシタス 112, 法政大学出版局.< Phēnomēnologie De La Perception.(1945),Gallimard,Paris.>

Merleau-Ponty,Maurice.竹内芳郎監訳(1962年),

『シーニュ 1』 (1969), 『シーニュ 2』 (1970), みすず書房.

< Signes, Gallimard, Paris. >

Merleau-Ponty, Maurice. ※滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの
付・研究ノート』みすず書房. (1994年) <L'oeil et l'esprit et Le Visible et
L'invisible.(1964), Gallimard, Paris.>

レナ・ヴィッサン, バーバラ・ハバーマン, サラ・ワイス, ハトリシア・ベナー
「パーキンソン病患者の生活世界の現象学的研究」212-228.(松葉祥一・三浦
藍訳, 2010年) vol.38-12. 『現代思想-特集*臨床現象学—精神医学・リハビリテ
ーション・看護ケア』青土社.

岡林春雄(2019年)『最新知覚・認知心理学：その現在と将来展望』金子書房.
リシール, M(和田渡・加國尚志・川瀬雅也訳)『身体—内面性についての試論』
(2000年) ナカニシア出版. <Richir, Mark.(1993), Le Corps: Essai sur
L'intériorité, Editin Originale: Le corps Public dans la collection: Optiques
Philosophie, Hatier. Paris.>

竹田青嗣(2007/8/18)「実践の原理としての現象学」於京都ひと・まち交流館、
日本作業行動研究大会講演要旨 1-19/19.

矢野泉・絵/矢野十愛(2018年)『想像力を育てる』株式会社パレード.

<謝辞>生涯教育学の師佐藤一子博士、教育心理学と現象学の師吉田章宏博
士、異文化間心理学・教育学の師箕浦康子博士、幼児教育の佐藤順子師、聖
書学の原雅幸師、多様性教育と生物学の高橋徹師、手技の木藤真美・隆介師、
学会等でお世話になった方、同僚、後進の碩学、卒業生・修了生、みなさま
に深く感謝申し上げます。本稿における研究の端緒が、厳密な学をめざすフ
ッサールの現象学から触発されたにもかかわらず、本稿構成における論説の
厳密さが完全とはいえないことは、筆者の克服すべき課題です。